

古代中国の地震とその「予言」

はじめに

一 「春秋」の地震記録(一)

二 前漢の地震記録

三 「春秋」の地震記録(二)

四 後漢の地震記録

おわりに

はじめに

筆者は先に、災異説が予占化して本来の天譴機能を喪失し、権力の神秘性と正当性を主張する讖緯説が一世を風靡した前漢末から後漢にかけて、神秘の「予言」を付与された童謡を社会に流布させることによって、また、惑星の異常運行や彗星・流星の出現消滅に「予言」的解釈を施すことによって、辛辣な政治批判が機能していたこと、換言すれば、それらの「予言」が災異説の失われた批判精神を継承していたことを明らかにした。ここに言う「予言」も、自然の猛威を借りてそこに天の意を託し、権力機構の不義不正を告発する政治的武器としての「予言」であって、いわゆる神託や天啓ではない。

周知のように、天文観測は周王朝にすでに行われており、その成果のひとつとして日食や月食、あるいは惑星の異常運行、彗星や流星の出現などから占星術が展開したこともよく知られる。しかし、「仰ぎて以て天文を觀、俯して以て地理を察す」(『周易』繫辭上)というように、天文と地理は一体であるはずだが、占いは専ら天文現象によるもので、地震を占いの対象とすることはあまりなかった。

もちろん時代が下がると地震も占いの対象となる。たとえば『地鏡』は『隋書』経籍志三(五行)に「乾坤鏡二卷。梁、天鏡・地鏡・日月鏡・四規鏡經、各、一卷。地鏡圖六卷。亡ぶ」とあるように、歴とした地震の占書である。今、『大唐開元占經』引く所を見るに、「地動」「地」「地陷」という、いわゆる地震のほか、「地燃」「地鳴」「地生毛」「地嘔血」などという異常現象も記録される。そこには、たとえば「地動けば、三年にして其の國民、東西に流る。動くこと十日以上ならば、必ず兵有り。地動くこと千里なるは、是れ陰盛んにして陽衰うと謂し、人君、四時を犯して土功を興し、年を出でずして、國に喪有り。地動きて城郭宮室を壊たば、是れ陰道失すと謂し、四海兵喪有らん」、「地、夏に裂けること一丈以上ならば、五穀を殺らす。秋に裂ければ、民流亡す。冬に裂ければ、大凶にして兵起こり、國主亡びん」、「地陥みて没入すれば、人君、臣下の擒うる所と爲る」など、具体的な占いが見られる。しかし、これは天文現象による占いが、『石氏占』や『甘氏占』などとしてすでに戦国時代にまとまっていたことを考えると、かなり遅い出現である。

漢代、地震も災異説に取り込まれるが、地震が占いの対象となりにくかったのはなぜか、『地鏡』のような地震占書が生まれるまでの地震の占いはどのようなものであったか、そして災異説で地震はどのように取り扱われ、どのように「予言」化していくかを解明することは、実は災異説の現実政治への影響力を考える上で大切なことではないかと考える。

本稿は実害が最も深刻な自然災害のひとつである地震をよりどころに、漢代の災異思想を再考しようとするものである。

おわりに

古くは地震は占いの対象とはなりにくかった。それは地震が天体と違って観測して予測できるものではなかったからであろうが、地震がもたらす災害が人々に神秘的解釈ではなく現実的思考を促したからではないか。もちろん天文の異変も予測はできても人々に精神的打撃を与え為政者に不安をもたらす脅威には違いないが、それは日常生活にさほど大きな実害はない。しかし地震は予測できないのみならず、その実害は天文現象の比ではない。地震は「地震う」こと自体が人々を精神的恐怖に陥れるだけでなく、地震の後に続く災害（家屋の倒壊、水害、山崩れなど）が深刻で、多くの人命を奪い、収穫に打撃を与えて経済を破綻させ、日常生活を不可能ならしめるからである。災異を天の譴責とする災異説にとって、地震は最も説得力のある目に見える凶事（不幸）であったということである。それ故、前漢宣帝以降、しばしば救済策を詔して善政を施し、それによって天の意に応えようとした。しかし、災異説が災異の応徴で社会批判をしていた前漢には、地震はその被害が直視され、地震から災異説を展開させる必要はなかった。

ところが、『續漢書』では地震による被災状況を『漢書』のように克明に記録することはなく、救済策も記録されない。ここでは被災者救済をアピールすることよりも、もっぱら地震発生そのものに「予言」的意味を付与した。これが前漢と後漢の地震記録の数的差となって表れていると考えられる。

司馬彪は日食・月食・虹・雨だけでなく、惑星・彗星・流星などの天文現象とその応徴とを、「五行志」にではなく「天文志」に記録している。この点に関して、かつて、泰始三年（二六七）に晋の武帝が星辰讖緯の学を禁止したことが影響しているのではないかと指摘したが、司馬彪は地震記録をことごとく「五行志」に記録することによって、異常なまでに多い地震発生がその後の政治的・社会的混乱を「予言」し、星辰による政治批判を地震に肩代わりをさせたのではなかろうか。

いずれにせよ、「災異」とは言うが、現実には「異」よりも「災」、天文異変よりも地上の災害こそ問題であったということ、中でも特に地震に注目せざるを得なかったというのが事実で、それゆえ地震の「予言」化が政治批判の武器としての機能を促したと考えられる。